

ヤドカリ兄弟の大冒険

徳之島町立神之嶺小学校 六年 林 礼門

「見ろよ、あの貝がら、穴が開いている。」

ぼくは、弱虫で泣き虫だ。友達も少ない。からに穴が空いているから、他のヤドカリに悪口を言われることもある。

ぼくのからには、大きな穴が一つ空いている。それがはずかしくて、外に出たり他人としやべったりする勇気も持てないでいた。

学校の帰り道を一人歩いていると、またあのヤドカリが、ぼくのからの上に乗ってきた。

「穴が空いている。かっこ悪いな。」

「やめろ、はなせよ。」

ぼくの貝がらを外そうとしてきた。ぼくは必死に貝がらをふり、ていこうした。そのとき、

「何やってんだ。」

声が聞こえた瞬間、体が軽くなった。助けてくれたのは兄ちゃんだった。

ぼくの兄ちゃんは、明るくて、友達も多い。はきみや足が太くてがんじょう。泣いているぼくをいつも助けてくれる。そんな兄ちゃんを、ぼくは心からかっこいいと

思っていた。ぼくの家は、大きな岩の百階建てマンション。どんな波が来てもびくともしない。弱いぼくとは大違いで余計に悲しくなる。ぼくは今までのくやしさを、初めて兄ちゃんに話した。海の塩よりもからい涙があふれてきた。その夜は、なかなか眠ることができなかった。次の日、いつもよりおそく起きたぼくは、目をはらしながら、からの穴を見つめていた。

「おい、一緒に新しい貝がらを探しに行くぞ。」

兄ちゃんのやさしい声だ。

「いやだ、こわいよ。」

ぼくは、おどおどした虫のような声で答えた。

「ずっとこのままいじめられていいのか。」

いつもの口調とはちがう、兄ちゃんの強い言葉が胸の奥まで届いた。

「大丈夫、兄ちゃんがいる。」

ぼくは、目を大きく光らせて、新しいからを探す大冒険に出発した。海の波が大きくゆれていた。目的地は浜の端。百階のマンションからも見えないほど遠い。そこには、激しい波で流れついても傷一つない強い貝がらがあるという。

「よし、絶対にかっこいい貝がらを探して、みんなを見返してやる。」

初めは、順調に歩き進めることができた。しかし、次

第に疲れがでてきた。足がしびれる。息がゼイゼイし、目の前が真っ暗になる。岩を登っているときだった。ぼくは足をすべらせた。体をすりむきながら落ちた。目をつむりあきらめかけたとき、あの声が聞こえた。

「大丈夫、兄ちゃんがいる。」

兄ちゃんの大きなはさみがぼくを包んでいた。兄ちゃんに支えられ、どうにか登り切ることができたが、兄ちゃんのからが欠けていた。ぼくのせいで兄ちゃんを傷つけてしまったと思うと、胸がはりさけそうだった。すりむいた自分の足より、心の中に痛みがはしった。

うつむいて歩いていたぼくたちは、いつの間にか道に迷っていた。辺りが急に暗くなる。月が黒い雲に包まれた。台風だ。

「兄ちゃん早く。あの岩の下に入って。」

でも、兄ちゃんは、早く動くことができない。ぼくを助けるためにけがをしていたからだ。ぼくは、後ろから兄ちゃんの大きな背中を力いっぱい押し上げた。冷たい雨が顔に当たり、目が開けられない。強い風が体をおさえる。だんだん力が入らなくなる。でも、ここであきらめたら兄ちゃんに今まで助けてもらった恩が返せない。今度はぼくが、兄ちゃんを助けたい。そう思うと、力があふれてきた。

「大丈夫、ぼくがいる。」

ぼくの声が自然と力強くなっていた。二人で岩の下に入り、台風がおさまるのを待った。

日の出と共に、ぼくは目を覚ました。真っ赤な朝日が出ていて、昨夜の台風がうそのようだった。兄ちゃんの傷もよくなっている。

アダンの葉がさわやかな風でゆれていた。

「兄ちゃん、早く冒険に行こう。」

「台風の後だから、きれいな貝や、めずらしい貝が流れついていられるかもしれない。」

二人は、元氣よく歩き出した。とうとう浜の端まで着いたときだった。

「見てよ、兄ちゃん、あれを。」

「ホネガイだ。」

太い角があり、まぶしい黄色の貝がらは、ひととき強そうに輝いていた。ぼくは、体をぴたりと合わせた。自まん気に胸を張った。

「兄ちゃん、ありがとう。」

次の日、学校に行くと、悪口を言っていたヤドカリが、「お前の貝がら、かっこいいな。」

と言ってきた。兄ちゃんとの旅を知り、ぼくを認めてくれたのだ。

兄ちゃんのおかげで、心も体も強くなれた。まぶしく光る海面を見ながら、ぼくが兄ちゃんに言った。

「今度は、兄ちゃんの貝がらを探しに行こう。大丈夫、
ぼくがいるから。」